欠けた心を埋めるもの

歌川

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

のらきゃっととその量産型である子との物語

のらきゃっと本人が語る彼女の世界とは違う、独自解釈と設定で書いています

目次

闇の向こうに見えたもの ―― 1
戸惑いと芽生えた想い ―― 11
眠りの向こうのその場所は ―― 21
日の光に包まれて ―― 28
番外編　鮎を釣りに行こう ―― 38
自覚できない想い ―― 43
電気猫の見た夢 ―― 56
二人を繋ぐもの ―― 65

闇の向こうに見えたもの

何度目の目覚めだろうか。
月日の流れを数えるのが不毛に感じてからは、色々なものが曖昧になっていった。
重い頭を動かして周囲を探る。
そこには何度も見たとおりの光景、鬱蒼とした木々、わずかに射す日の光、無残に千切れた自分の手足が目にはいるだけだった。
輸送機の護衛、それが私に任された任務だった。
直接戦う事は少なく、護衛と言うよりも輸送の手伝いと言う方がただしかったと思える。
そしていつも通りの輸送任務からの帰還中の出来事だった、敵側の飛行部隊に襲われたのだ。
最低限の自衛用の装備しかない状態だったが、
敵は無人の戦闘用ドローンのみだったので、弾は使い果たしたがどうにか迎撃できた。
そんな状況で敵の第2陣、有人の戦闘機部隊を相手にすることは不可能に思えた。

そこで私は刀を持ち出して輸送機から飛び出した、自分の脚力のみ飛び敵の戦闘機に攻撃をしかけた。
敵部隊の3機の内2機は何も問題なく撃墜できた、しかし3機目に飛び掛かろうとしたとした瞬間、ミサイルが発射されてしまった。
唯一の武器である刀を投げ、ミサイルを破壊する、そして素手のまま3機目に飛び掛った。
一連の行動全てが間違いじゃないかと言われればそうだと思う、だけど決定的なのはその行動だった。
私は飛び掛りながら、コクピットを殴り壊すことはできないだろうか、そんな事を考えているとバシュンと弾けるような音が聞こえた。
パイロットが脱出装置を使い逃げ出した音だった、それに気をとられた一瞬、尾翼の存在に気がついた時には回避は不可能だった。
両手で防御姿勢をとり直撃を防ぐ事はできたが両手は完全に破損してしまった。
空中に投げ飛ばされ、元々絶望的だった帰還が不可能だと悟るが、そのまま死を許容できるほどの潔さもなかった。
といっても何の装備も無い状況で出来ることは何も無く、
地面に衝突する瞬間に、思い切り地面を蹴って落下のダメージを殺そう、そんな案し

か思い浮かばなかった。
地面を蹴った瞬間、強すぎる衝撃に頭の中に強いノイズが走り、気を失ってしまった。
気がつき、辺りを見渡すと着地の衝撃に耐えられず、太ももから千切れ、地面に刺さったままの両足が見えた。
そして落下の抑えきれなかった衝撃で転げまわったせいなのだろう、破損しかけだった腕もバラバラになり、辺りに散らばっていた。
こうして運が良いのか悪いのかわからないが、私は生き残ることができたがそれが幸運だとは思えなかった。
森の中でただ一人、来るはずのない救助を待ち続ける事になったのだから。

延々とただ待ち続けること、私にはそれしかできなかった。
数々の衝撃のせいだろう、内臓されているオンラインシステムは全て使用不可能な状態になり、救助を呼ぶ事はできない。
エネルギーが潤沢だったのなら、這い回って人のいる所まで行けたのかもしれないが、
先ほどの戦闘のせいでそれをほどのエネルギーも残っていなかった。
日光での充電もこの薄暗い森の中では生命維持が精一杯だろう。

何も出来ない状態で出来る事を考えた結果、
私はスリープモードで眠りにつき、1週間毎に目を覚まし、自分の無事を確認する。
それを救助が来るまで続ける、この状況ではそれ以外にとれる行動は思いつかなかった。
全ての機能をシャットダウンしてしまおうか、とも考えたがもしそのまま救助も来ず、永遠の眠りについてしまったら、
そう考えるとシャットダウンするという選択肢を選ぶのは恐ろしかった。
そして私はどれ位の月日の間ここにいるのかわからないほど、救助を待ち続けた。
風雨に晒され続けた軍服はズタボロの布切れになり、皮膚も劣化し段々とボロボロなっていった。
秋には落ち葉に埋もれ、冬には雪が積もり、春になるたびに顔を出す私の手足はどんどん色あせ、私の中に絶望を深くさせる。
最初の1年が過ぎた頃からもう理解はしていたのだが、こうしてハッキリと年月により示されると心も沈んでいくものだと実感する。
軍は私を死んだものとして扱っているという事実を受け入れるのは、難しいものだった。
所詮私は切り捨てる事が容易な戦闘用のアンドロイドなのだという事が深く、深く私

の気持ちを悲しみに沈めていく。
そんな中思い返すのは家族の事だった、最初は彼等の無事を願うのが数少ない希望だった、それすらも年月は絶望に染めていく。
部隊の皆は私にとっての家族だった、私を含めて5人しかいない小さな部隊、猫型だから「タマ」だなんて安直な名前をつけるような人達だったが、
共に戦い、寝食を共にし、励ましあい、時には笑う、そんな暖かい場所だった。
だけど、こうして何年もの間ここに残されたままだという事実が、あの部隊で感じた温もりは、仮初のものだと感じさせた。
所詮は換えの利く兵器との、都合の良いだけの関係だったのだと。
そう思うとタマという名前、それにすら名前を考える価値の無い兵器つけられた投げやりな名前なんだと感じるようになった。
ただ、死なないだけ
絶望に飲まれながらも私はただ死なないだけの作業を続けていた。
もう私の中にあるのは、あの日生き延びた奇跡には何か意味が有るんじゃないかという、
何の理もない理由だけど、それにすがるしか生きていく意味を見出せなかった。
それ以外のものは散りゆく自身の体のように、ゆっくりと削られていった。

目を覚まし、辺りを見渡し、何の変化もない周囲を探り、眠る。
「次に目が覚めたら、違う景色が見れますように」
そう願いを呟き、何度目かわからない眠りについた。

目を覚ました瞬間、辺りの空気が違う事にすぐに気がつく。
暖かな日の光に、森の中のとは違う、湿り気のないさわやかな風が頬を撫でる。
「ここは…どこ?」長い間私を苦しめ続けてきた悪夢のような光景とは違う、
辺りを確認すると私のいる部屋は広めの寝室のように感じた、その部屋のベッドで私は寝かされているようだ、
大きな窓から見える景色は、今まで見たことの無い和やかな空気を感じる。
私はどういう状況におかれているのか、狼狽しつつも改めて部屋の中を探った。
何故今まで気づかなかったのだろうか、黒いドレスを着た少女がベッドの横で椅子に座り眠っているのに気がつく。
「あの…すまない…、起きてくれないか」と声をかけると目の前の少女はゆっくりとノビをし、目をこする。
ふと、少女の頭の機械で出来たネコミミが目に入る、彼女も私と同じアンドロイドだと気づいた。

「おっと、すいません、日差しが心地よくてつい眠っちゃいました……あっ…目…、覚めたんですか？」
「あ…ああ、私は今どうなっているんだ？そしてここは？
何故修理をしないで私は放置されてるんだ？こんな状態では任務も何もないだろう？」
そう質問を投げかけると、少女は無言で私の頭を抱いた。
「大丈夫ですよ、今はゆっくり休んでください、もう戦争は終わったんです」
「終わった……？」
諭す様に語りながら、少女の柔らかな指が私の髪をなでる、安心感のせいだろうか、段々と目蓋が熱くなってくる。
指はだんだんと下のほうに移り、頬を撫でる。
「こんなにボロボロになって……安心してください、もうあなたが傷つく必要も、戦う必要もないんです。
だから我慢しないで、泣きたいだけ泣いてください」
その言葉を聞くなり、抑えきれなくなった感情が爆発した。
死に近づいていくだけの恐怖、それを抑える為にも私は涙を流すこともなく、そういった感情はないものとして押し込んでいた。

もう我慢する必要が無いとわかると涙を抑える事はできなかった。
今までの恐怖と悲しみ、そして生き残った事の喜びの涙を延々と流し続けた。

取り出したハンカチで、涙に濡れた顔を少女が拭いてくれた。
「すまない、取り乱してしまって…それに服もずいぶん汚してしまった」
「大丈夫ですよ、洗えばいいだけです。ところであなたの名前を教えてもらっていいですか？」
一瞬タマ、と口から出そうになるが、私のことを見捨てた彼らからもらった名前をつかうのは憚られた。
「名前……忘れてしまったな、好きに呼んでくれていいよ」
そういうと少女は少し悲しそうな顔をする、私の内心を読まれている様な気がして少し気まずくなる。
「そういえば、あなたの名前はなんて言うの？」
「私ですか？私はのらきゃっとです」
「のらきゃっと？それって名前じゃなくて機体名だったような…」
彼女は笑顔を作りなおし、私の疑問に答える
「そんなの気にする必要ないじゃないですか、私はのらきゃっとで私なんですから！」

よくわからない理論だが、自分の名前を言うつもりがないのだけは理解できる、
しかしそんな彼女の奔放な様をみて少しだけ元気が沸いてきた。
「じゃあのらきゃっとさん、私も出来れば自分で動けるようになりたいんだけど、修理用のパーツはないの？」
少し気まずそうな顔をするとくるりと回り、背中を見せる。
「それにはですね…戦争の終結が原因といいますか、必要の無い物ってそんなに作らないのが常識っていうか…
私達の予備パーツってあんまり作ってないんですよね」
「え？そうなの？」
「機体の生産自体も終わってますからね……でも早ければ一週間ぐらいで来るかもしれないって」
「そう、一週間…」
「でも安心してください！その間の面倒は私がしっかり見てあげますから！」
「いいよ、そんなの。またスリープモードにでもなってれば――」
そう言い掛けた時、ベッドをバンと叩く衝撃が走る
「それは駄目です！あなたはせっかく生還したんですよ！最悪だった日々が終わってやっと幸せな日々が始まるんです！

その始まりを怠惰に寝て過ごすなんて駄目ですよ！もっと有意義に使わなければ！」
突然まくし立てるように言葉を並べ始める
「有意義っていってもね、こんな状態で何すればいいのさ」
「そんなのは簡単ですよ、プロデューサーさんの出張で寂しい私の会話相手です！」
あんまりにも自分勝手な理由、だが目の前にいる少女は私の命の恩人で間違いないのだ。
不便ではあるがわがままにつき合って上げるのが義理というものか。
「わかったよ、のらきゃっとさん、動けるようになるまではよろしく頼むよ」
「ありがとうございます、じゃあ早速お話しましょう。とりあえずあなたを拾ってきた時のことでも」
こうして私は彼女と共にすごす事になった。
彼女からは破天荒な気配を感じたが、同時にこの子と一緒にいたい、そう思わせる何かを感じた。
だけど表には出さないようにした。
だって何かくやしいじゃないか、出会ってすぐに惹かれる物を感じてしまったなんて。

戸惑いと芽生えた想い

今から数日前、私は普段行かないような所に行きたい、突然そう思い立ち遠出をしたんです。

それで普段は行かないような場所に冒険に出かけたんです。

気の向くままに樹海に飛び込み、何かないかと歩き回っていると妙な景色が見えたんです。

全く人の手が入っていない場所なのに、木が何本も折れていて何があったんだろうと調べてみると、

そちらに向かうと衝撃的な物が見つかりました。

「足が地面から生えてる!」

長い年月の間放置されてたせいでしょう、コケや錆で酷い有様でした。

まじまじとそれを見つめていると、ふとその形に見覚えがあるように感じました。

「これ…私の足と同じ?」そこでふと思いました、何でこんな所に足が生えているのかと。

もしかして近くで動けなくなっている機体がいるんじゃないか、そう思って辺りを探

しました。
周囲を探すと、ひしゃげた腕を見つけました、
足からそう遠くない位置にあったソレから、この腕と足の直線状に誰かいるのではないかと歩き始めました。
いるとしたら動けない状態だろうと思い、
踏んでしまわないように恐る恐る探りながら歩を進めると、周囲よりも若干盛り上がっている場所がありました。
そこに近づき、確認してみると思ったとおりに動けなくなっている人、私と同じアンドロイドがそこにはいました。
「これは……生きてる…んでしょうか?」
風雨に晒され劣化が激しい皮膚、場所によっては内部が露出し始めている所も見えます。
そんな状態で四肢が破損し、転がっているんです、生きてるとは思えないしょう。
ですが念のため生態反応の確認をしてみると、驚くべき事に生きていたんです、
そうなったらもう見捨てる訳にも生きませんから、背負って家まで帰ったんです。
――
「本当に大変だったんですよ、帰り道もわからないのに重い荷物まで増えてしまった

んですから」
「いや…帰り道がわからないのは私には関係ないだろ…助けてもらったのは感謝するけど」
「あなたを連れ帰るのも大変でしたけど、帰ってからも苦労しましたよ。
軍に未確認の生存者がいたぞと文句を言いに行ったり、パーツを買おうにもそもそも置いてなかったり、
あなたは何時までも目が覚めなかったりで、私は気が休まりませんでしたよ」
「そうか、色々苦労させてしまったんだな…すまない」
私を気づかってくれる人がいる、今の私にはそれだけでとても心が満たされる。
それだけにその相手に苦労をかけた事が申し訳なく感じる。
「冗談です、苦労したなんて思ってませんよ。私達アンドロイドは姉妹のようなものですからね
家族を助けるのに苦労なんて感じません」
そういうと彼女は素敵な笑顔を私に向けた。
数年ぶりの雑談というものはとても愉快ものに感じた、
なんて事の無い会話でも目頭が熱くなり、涙が溢れそうになってしまうほどだった。
そんな会話の中、飲み物として出されたレモン味のするコーヒーにはかなり困った。

二つの味が口の中で喧嘩してなんとも言えないものだった、
彼女は嬉しそうに講釈を垂れているが、その内容は私には理解しがたいものだった。
そして口に運ばれたものを拒絶できない私はボトルの半分を飲まされた。
好ましくないお茶会が終わると、丁度チャイムが鳴る。
彼女はそれに出るために部屋を出る、荷物を片手に持ち戻ってくると私を背負い移動を始める。
「どこにいくんだ?」
「とりあえず、私に今できるだけの修理はしておこうかなって思ってちょっとした物を頼んでおいたんですよ」
寝室や廊下などの見える範囲から感じる家の雰囲気とは若干違う、荒れた雰囲気のある部屋の中に連れ込まれる。
工具や色々な計器の付いた機械からするとメンテナンスルームのように見える。
そして真ん中にあるいかにもな台の上にそっと置かれる。
「ここは?ずいぶん荷物が雑に置かれているが」
「見てわかると思いますけど、ここ私用のメンテナンスルームなんですよ。
といっても、修理が必要になることもありませんから、ほとんど物置みたいになってますけどね」

「で、私に何しようって言うんだ?.修理しようにも物が無いとさっき言っていたけど?.」
ススッと私のお腹の上に指を這わせる、柔らかい指の感触が少しこそばゆい。
そして肌が劣化し、露出している機械部分をコンコンとつつく。
「ほら、こうやって丸見えになってる箇所があったり結構酷いんです…
顔だってボロボロで可愛い顔が台無しですよ」
「可愛いって…のらきゃっとさんだって同じ顔だろ?.」
そう言うと少し考えるような素振りを見せてから口を開く
「その、のらきゃっとさんって呼び方、堅苦しいですね……」
「それはそっちが名前を教えてくれないからだろ?.」
「そういうのじゃないんですよ、もっと柔らかく、のらちゃんとかそんな感じで呼んでください」
のらちゃん、向こうからしたら何の気もなしに出した案なのは分かるが、
相手をちゃん付けで呼ぶなんて事は私の人生の中には無い経験だった。
そのせいで口を開いても、羞恥心から口をパクパクとさせるだけになってしまった。
「……じゃあ…のらさんって呼ばせて貰うよ」
顔を赤らめそっぽを向きながらそう返した。
「まあいいでしょう、新鮮な呼び方でなんか面白いですし」

なだめるように頭を撫でられる、足があったら私はもう逃げているだろう。
だが今の私はそれを受ける以外の選択肢はなかった。
身動きの出来ない状況を苦痛だと思うのは久しいことだった。
羞恥心からその場から逃げたいと願っても逃げることは出来ず、ただ顔を赤らめることしか出来ない。
そんな私の顔を見て彼女はさらに、かわいいかわいいと辱めながら、撫でる手を加速させる。
「もういいだろう！修理するなら早くしてくれ！」
我慢できずに大きな声で抗議すると、しょうがないなという感じでため息を吐きながら手を離す。
「嫌だっていうならしょうがないですね、まあ何時までも遊んでないで早く始めましょうか」
先ほど届いた荷物を開いて大きめのチューブを取り出す。
「アンドロイド用の人工皮膚を修理できるっていう面白いものがあったんで買ったんですよ。
このナノマシン配合の液状特殊シリコン！」
「ナノマシン…？なんでそんなものが入ってるんだ？」

「これはですね、塗った箇所の周囲の形状を計算して、質感や色を再現して完璧に治す事ができるらしいですよ」
「なんだか…胡散臭いな、変な風になったりしないか？」
「塗りすぎると膨らんだりするらしいですけど、傷口からはみ出しすぎなければ問題ないみたいですよ？」
十分恐ろしいリスクだと思いつつ、自分の体を改めて見つめる、
ポツリポツリと露出している機械部分もそうだが、全体的に見ても酷く荒れている。
彼女曰く、顔も台無しといえる有様らしい、少し怪しいがせっかくの好意に甘えることにした。
私が肌の修繕を頼むと、汚れてもいいように作業着に着替え戻ってくる。
「じゃあ、とりあえず全体に塗りますね」と手袋をして、チューブの中身をお腹の辺りに塗り始める。
塗られた箇所が少しだけ熱を持ち始めている感じがする、しかしそれ以上に彼女に触られている箇所に熱とは違う感覚が走っている感じがする。
「んんっ！」
自分でも驚くような高い声が口から漏れる、その声を聞いた彼女は呆気に取られたように引きながら手を離す。

「どうしたんですか急に、喘ぎ声みたいな声を出して」
「喘いではいない！ただなんか…妙なんだ…のらさんに触られた場所から妙に…こう…ぞわぞわする感じがするんだ…」
「……それやっぱり喘ぎ声なんじゃ…いやそれはどうでもよくて、お腹に触っただけそんな風になりますかね？
　感覚器が壊れてるのかも？」
「そんなの私のほうが聞きたいよ、ただ通信機能とか色々と壊れてはいるから頭に異常があってもおかしくはないか」
　彼女は行き場のない手で空を掴みながら何かを考える、そして「じゃあ、我慢してくださいね」と笑顔で結論を出した。
　ぬるりとした感触のものが私の体に塗り広げられていく。
　ナノマシンが皮膚を形成して行く時の作用なのだろうか、薬を塗られた箇所から熱を感じる。
　それ自体は激しい物ではなく、問題ではなかった。
　問題は肌に軽くでも圧力を感じると私の体は快楽に近い物感じてしまうようだった。
　頭を撫でられてもそんな問題は起きなかったので壊れているのは上半身の部分なのだろうかと分析する。

「んっ…くぅん…はぁ…」
別のことを考えて、体に走る快感から逃げようとするが断続的に体に走るそれに体が跳ねる。
ビクンと体が反応を起すたびに予期しない箇所に彼女の指が触れ、またそれが快感を生む。
「はぁ…はぁ…はあぁっ！」
一際大きく体を仰け反らせると、彼女は一旦手を離す。
「上半分は終わりましたけど…大丈夫ですか？」
「だい……大丈夫とは…言えない…な…」
肩で息をしながらどうにか返事をする。
最初のうちはただの快楽として受ける事が出来たが、
断続的に、しかも強烈な物は、いくら快感と言っても苦痛に感じるのだと知った。
許容できる限界は何にでもあるのかと、天井を見つめながら思う。
「そうですね、じゃあ少し休憩しましょうか」
そういって手袋を外し「何か冷たいもの持って来ますね」と部屋から出て行った。
ーーー
廊下に出て扉を閉めると足の力が抜けてその場に座り込んでしまいました。

「なんでしょうね…この気持ちは…」
私はやらしいつもりは一切無く、ただ修理をしてあげたいと思っての行動だった。
不具合が原因とは言えあんなに激しく悶えるとは思ってなくて、その姿にとても強く気持ちを動かされました。
快楽を一方的に受ける事しか出来ず、その恥辱を受けながらも逃げられない。
ただ我慢することしか出来ずに、悶えるその顔が、自分と同じ顔が恥辱に悶えている、その姿に私は――
「止めましょう、変な事を考えるのは」
気持ちを切り替えるつもりで、台所に向かいながらも色々と考えてしまう。
姉妹のような存在、取り立てて見た目の違いの無い量産機である彼女。
しかも出会ったばかりの彼女に親愛に近い気持ちを持ちつつある自分に驚く。
しかし今の彼女は身動きも出来ないような状態だ、これは彼女が全部私の手の内にあるから感じる感情なのか？
私が私を好き過ぎるナルシズムのひとつなのだろうか？
気持ちの整理が出来ないままに、冷蔵庫を占領するコーヒーのボトルを手にしてメンテナンスルームに戻った。

眠りの向こうのその場所は

「よく考えたら触覚のパラメーターならこの部屋で直せました！」
下腹部の修理を終え、地獄のような快楽から開放された私の耳に信じられないような言葉が聞こえた。
「そ…そうか…のらさんは…悶える私を見て楽しんでたってことか……」
「そんなんじゃないです、本当に忘れてただけなんです！あまり使う機会がもありませんし、
しょうがないじゃないですか」
そして私が息を整えるのを待ってから、寝かされている台の下からヘッドギアを取り出し、私の頭に被せる。
私の見えない位置にあるモニターをポチポチと何か操作をしているが、
「そもそも基準値ってどんなものでしっけ…」「多分こうかな？多分大丈夫」と不安になる呟きが聞こえた。
「はい、これで元に戻るはずです、少しだけビリッってするんで我慢してくださいね」
「ちょって待て！本当にそれでッッッッ！」

少しだけ、という範囲では収まらない衝撃が頭に走る、先ほどとは違う種類の感覚で同じように悶える。
「おおおおお……全然少しじゃないぞ！頭が割れたかと思ったぞ！」
「凄く痛いと言われても不安になるだけじゃないですか、まあそんなにピリピリしないでくださいよ。
だってほら」
彼女の指が私のお腹の上を滑るが、先ほどまでと違い過剰な感覚が訪れることはなかった。
「うん、問題ないみたいですね」
話を聞いただけでは怪しい感じのした修理剤だったが効果は本物だったようで、先ほどまでとは見間違えるように、つややかな皮膚になっているように見える。
「皮膚のほうも問題ないみたいですね」
つんつんと先ほどまで穴の開いていた箇所を突かれるが、柔らかく皮膚が伸縮する感じがした。
「スベスベですよ、スベスベ」
機嫌良く、そして確かめるように、体を撫で回される。
「ふっふふ、そんな風に撫で回さないでくれ、くすぐったいたいってば」

「少し我慢してくださいね、遊んでる訳じゃなくて傷が残ってないか確認してるんですよ。」
「それは良いけどこっちだってくすぐったいんだ、手早く頼むよ」
気を紛らわせるために天井を見つめて、彼女の手つきを意識しないようにする。
それでもワサワサと念入りに体中を弄られるのは気持ちが落ち着かない。
ボーっと天井を見つめていると、こんなに見える景色が変わる事なんてどれぶり位だろうかと頭に過ぎる。
今私は、正に身も心も満たされ行っている、全て彼女のおかげで。
それなのに、礼を返せていないばかりか、文句ばかり言っている自分に気がついた。
「なんか私、良くしてもらってばかりなのに悪態ついてばかりだな…」
「別にいいんですよ、あなたはとても辛い目にあったんですから・・・
今は好きに振舞っていてください、私へのお礼とかそういうのは元気に動けるようになってから考えてください」
「そうか…そうだな、今はただ好き勝手にしてればいいんだな……」
今の私はどれだけ弱っているんだろうか、彼女の心遣いに我慢出来ずに涙があふれてくる。
「でも今は泣くのを我慢してくださいね、顔の修理もしちゃいますから」

軍人が人前でボロボロ泣くんじゃない。
育ての親の隊長からはそう教えられた、今となっては親とは思えない存在だが。
それを別にしても、人の前で涙を流すことが私にとっては恥ずかしいと言うのは変わらない。
情けなくも弱みを彼女に見せ続けている自分が情けなく感じる。
そんな情けなさで、モヤモヤとした気持ちを抱えながら私はリビングのソファーに座っている。
座るというよりは立てかけられている、が正しい。
晩御飯の用意をするので待っていてください、と点けられたテレビを眺めている。
あまり大きくのない事件に時間を割き、ニュースの合間にどこ出かけるのが良いだとか、そんな情報も伝えてくる。
それを見ていると、彼女の言っていたとおりに戦争はもう終わっているのだと実感できた。
本当に私達アンドロイドが身を粉にしなくていいんだと安堵した。
数年ぶりの食事はカレーだった。
口に運ばれるスプーンから食べるというのはとても恥ずかしいものだったが、
そんな恥が馬鹿らしいと思う位、美味しいカレーだった。

久々に味わう最初の味があのコーヒーではなくこのカレーだったなら、その一点は強く惜しく思う。
食事を済ませ、リビングでのんびりとすごしてからベッドに運ばれる。
四肢の欠損から水が内部に入る可能性が高いので風呂は流石に遠慮した。
ベッドの上で私に布団をかけ、その横に彼女も横になる。
「おやすみなさい」
「ああ、おやすみ」
人と寝食を共にする事、それがどんなに素晴らしい事なのかと噛み締めながら目をつぶる。
しかし眠れなかった、気が逸るばかりで逆に目がさえて来る。
眠れない理由は分かっている、私が恐れているからだ。
暖かいはずの布団の中にいるのに体は震える、心はどんどん凍えてくる。
「眠れそうにないな……」
ベッドに入ってから十数分、そんな独り言をつぶやく。
「眠れないんですか?」
「なんだ、起きてたんだ」
彼女を心配させたくない、そのつもりで寝た振りをしていたのだが意味はなかったよ

うだ。
「起きてるなら、話を聞いてもらっていいかな、私は今凄く不安なんだ」
「いいですよ、どんどん話しちゃってください」
「のらさん、あんたは本当に存在するのかな？」
「哲学的な話ですか？そういうのはアンドロイドにとっては深い問題ですよね」
　頭に手を当て考え始めている。
「いや、そういう難しい問題じゃないんだ、単純に今そこにいる存在なのかって。
　今この状況は、本当は私が死ぬ直前に見てる幻なんじゃないか、それが不安でしょうがないんだ」
「それは・・・そんなことはありませんよ、だってほら」
　彼女の腕が私の頭を優しく撫でる。
「幻にはこんな事できませんよ」
「……ありがとう」
　一言だけでは私の気持ちは伝えきれない、だけど今の私にはそれしか返す言葉が見つけられなかった。
　私を撫でていた手が胸元に下ろされる。
「眠れるまでこうしてますから、安心して眠ってください」

その言葉を聞くと一気に眠気が押し寄せてきた、もう少しお礼を言いたい、そう思ったが口を開く事はできなかった、

思考するよりも先に眠気に飲まれてしまった。

胸に伝わる熱に心地よさを感じながら私は眠った。

日の光に包まれて

新たな同居人を向かえ入れて初めての朝、目を覚ましてすぐに環境の変化に少しばかり胸を躍らせる。

落ち着いた寝息を立てる同居人がまだ目を覚ます気配がないことを確認すると、呑気そうな寝顔でまだ眠っていた。

毅然とした態度を崩さないようにはしているつもりなのだろうが、昨日の交流でどこか抜けているのもなんとなく理解できたし、

それも間違ってなさそうだった。

ノビをして眠気を飛ばしてからカーテンを開けて朝日を部屋に入れる。

「おはようございます、もう朝ですよ」

日の光に照らされ、これで彼女が起きるだろうと思っていたが布団の中で身じろぎ一つしないままだった。

「もう、しょうがない人ですね」少し呆れつつ起こす為に彼女の体持ち上げる。

「起きないと感覚元に戻しちゃいますよ」意地悪を言いながら高い位置まで掲げると何か可笑しい事に気がつく。

息をしていない、先ほどまではしていたはずの呼吸が完全に止まっている。
開かれた目蓋の先には、青ざめた私を移したまま動かない瞳が見える。
理解できない状況に固まっているとゴトリと何かが落ちる。
ゴロゴロと転がっていくそれに視線は釘付けになる。
目で追っていくうちに、それが白い髪の生えた何かだと認識した瞬間、私は思わず目を閉じた。
アレがもし私が思っている通りの物だったら、今はその恐怖から目をそらす事しかできなかった。
沈黙に包まれたままの部屋の中、抱きかかえたままの体は段々と冷たくなっていく感じがする。
何故、どうして、理解できない状況に私は固まってしまう。
そこで考え方を変えてみる、彼女はあんな状況で生きていたんだから、
意外とまだ大丈夫なんじゃないかと前向きに考える。
私は意を決して目を開らくと、そこにはがらんどうになった瞳で私を見つめる彼女の頭が転がっていた。
パクパクと口を動かし、何かを喋ろうかと思ったが私の口からは何の言葉も出ず、
体からは力が抜け彼女の体を落としてしまう、その場に崩れるようり座り込んでし

まった。
　恐怖や後悔に体が支配され、私を見つめるその虚空から目を離せないでいると口が開かれ何かを私に伝えようとしてくる。
「お……ろ……」
　何かを喋っているのは分かるがなかなか聞き取れない
　恐る恐る四つんばいで、近づき耳を傾けると大きな声が私の耳を貫く。
「おい！起きろ！もう朝だぞ！」
「うわあ！」
　突然の大声に飛び上がると私はまだ布団の中にいた。
　横を見ると不機嫌そうな顔をしている彼女が見える、昨晩見たままの姿で私を睨んでいた。
「夢……だった…」肺の中にある空気を全て吐く勢いで息を吐く。
「はあぁーーー・・・良かった…夢で本当によかった…これ大丈夫ですよね？変な暗示だったりしませんよね？」
　彼女の首の全体を確かめるように探るが特に問題は見当たらない。
「起きてすぐ人の首を絞めるのは止めてくれないか、苦しいんだけど」
「おっとすいません、首を絞めてるつもりはなかったんです、ちょっと嫌な夢を見てし

まって……

あなたの首がもげる夢を……」

「私の首……首は大丈夫だ、激しいダメージを負ったりした記憶はない」

首だけでブリッジをして大丈夫だとアピールをする、確かにその様子から見て問題は無いようだ。

「まっ整備をしてないから万全かどうかは別問題だけどね

それにしても妙にうなされてると思ったらそんな夢を見てたのか」

「安心して眠ってください、なんて言っておいて私の方が心配かけちゃうなんて不甲斐ないですね」

夢のせいとはいえ、迷惑をかけてしまい申し訳なくなる。

彼女にとっては特別な朝なのだ、出来れば気持ちよく目を覚ましてほしかった。

「そんなの、私の方こそ迷惑かけっぱなしだ、気に病まなくていいさ、それよりも…」

嬉しそうに、口角を上げながら口を開く。

「おはよう、私は挨拶できる相手がいるって事がたまらなく嬉しいんだ」

パンをトースターにいれ焼きあがるのを待ちながら、先ほど彼女が見せた笑顔を記憶の中で反芻する。

彼女の見せた笑顔はなんだかとても素敵な笑顔に見えた。

ただ笑いかけるのではなく、本当に幸せだと思える時にしか出ないような表情、心からの笑み。

彼女の境遇を考えればそんな表情にもなろうというのは簡単に理解できる。

でも私がその笑みに心が激しく乱されている、その理由はわからない。

トーストの出来上がる音で現実に戻され、答えの出そうに無い悩みは放っておく事にした。

焼いたベーコンとスクランブルエッグ、それらを一口大に切ったトーストの上に乗せる。

「はい、あーん♪」それを彼女の口元に持って行き食べさせる。

「……ん…」恥ずかしそうにしながらも口を開き食べた。

彼女がモグモグとしている様を見つめながら自分の分を食べる。

「うん！良い感じですね」彼女はご飯の時は喋らない性質なのか、「ご馳走様、美味しかった」以外は喋らなかった。

朝食を終え一息ついてから、そろそろはっきりさせておくべき問題を問う。

「そろそろ名前を教えてくれてもいいんじゃないですか？」

聞いた瞬間、心底嫌そうな顔を作る。

「……名前は忘れたって言っただろ、好きに呼んでいいって言ってるだろう」

昨日もそうだったが、彼女は特定の話題について話す時に言いよどんだりする時がある。

とくに名前については昨日から何度か聞き伺ってみたが、その話については拒絶に近く、全く取り付く島がないように感じた。

彼女の名前は聞き出せそうにない、しかし名前がないのも非常に不便だ。

頭を悩ませている間彼女は一切口を開かない、完全に私へ丸投げしている感じだった。

もう直感で行こう、次に思い浮かんだ単語を呼び名にしようと心に決める。

ざっと部屋の中を眺め取っ掛かりを探ると、黒ブチのある白い猫のグッズが目に入り、そこでピンとひらめく。

「決まりましたよ！タマです！今日からあなたの名前はタマ！」

明らかに投げやりな考えで出したであろうその名前に戸惑いを覚える。

ありがちな名前だとは思っていたが、まさかいきなり本名を被せてくるとは思わなかった。

自分から好きに呼んでいいと言った手前、その名前以外で頼むというのおかしい。

断った所で理由を問われれば結局私の名前がタマであると言うのは割れてしまうだろう、
その上で別の名前で呼んでくれというのも酷な話ではないか？
それにのらさんがタマと名付けてくれるのなら、受け入れられる。
不思議とそう思った。

再び顔をしかめると黙ったままなにやら考えこんでいる様子だった。
流石に猫型だからってタマというのは安直過ぎただろうか？
断られた時の為に次の名前を考えていると「それでいいよ」と彼女が答えた。
「ちょっと安直じゃないかって思ったけど、まあ私はお世話になってる身だしね。
それでいいよ」
ハニカミ、少し嬉しそうにしている。
言葉とは裏腹に気にってくれているようだが念を押して問う。
「嫌だったら他に考えますよ、私ネーミングセンスには自信がありますから！」
「じゃあ参考までに聞かせてもらうけど、タマの次はどんな案があったんだ？」
「ドラちゃん！」

私の会心の案は一笑に臥されてしまった、
タマが駄目だった場合は本当にそう呼ぶつもりだっただけに少し残念に思う。
そして何時までも裸のまま過ごさせるのも可哀想なので、いい加減服を着させてあげた。
大き目の白地のTシャツ、以前変なTシャツを作った時の余りで無地のままの物があったので丁度良かった。
「服って久々に着るとこそばゆいんだな」とタマさんは語る。
アンドロイドも野生に帰るのかと何か感慨深いものがあった。
所用を片付けて気がつけば昼下がり、部屋の中には暖かい日の光が差し込んでいる。
ソファーの上でタマさんを横に座らせてテレビを眺めながのんびりと過ごす。
「そういえばタマさんって食事の時、妙にしずかですよね」
「ん……それはただ人の手から食べるのに慣れてないだけだ、恥ずかしさで一杯になって喋る余裕がないだけさ」
「ああ、そんな理由だったんですか、てっきり食事中は喋らないって教育を受けたのかと」
「そんな行儀の良い教育はされてないよ」
会話を重ねていくと、少しづつタマさんが言いよどむタイミングが見えてくる。

どうも過去の事に関連する事を喋りたく無いようだった、あんな所に放置されていたのと関係のある事なのだろう。
だからといってその事を聞きだすつもりはない、
本人が私に話したいと思った時に聞いてあげればよいだけの話なのだから。
彼女を労わりたい、そんな気持ちも有るには有るが、それとは別に頭を撫でたいから頭を撫でる。
「どうしたんだい、急に」
「何でもないですよ、ただ可愛がりたいなーってだけです」
口から笑いを漏らしながら「なんだそれ」と一言だけ喋ると私に体を預けるように倒れた。
それを受け止め、足の間に運ぶ。
「暖かいな、こんな風に日の光を浴びるのも何年ぶりかな……なんだか眠くなってきた……」
「そうですね、丁度日差しの気持ち良い季節ですから」
「うん…悪いけどちょっと眠らせてもらうよ……」
ゆらゆらと頭を揺らしていたと思うとその場で眠り、可愛らしく寝息を立て始める。
昨晩と違い、すっかり眠る事への恐怖はなくなったようで私も安心する。

安心感から私にも眠気が訪れた。
眠ってしまう前にタマさんを抱き、ソファーの上に深く座りなおす。
「あったかい…」
日の光と彼女のぬくもり。
幸せな暖かさに釣られて私も眠りについた。

番外編　鮎を釣りに行こう

僕の名前はレイと言います、メイドのような事をしているアンドロイドです。
友達と出かけた時の事をお話したいと思いますね。
「鮎食べたいって思ってたんですよ、これから一緒に釣りに行きませんっ?」
のらちゃんと会話をしていると突発的な提案を受ける。
のらちゃんとは同一の機体で近くに住んでいて、たまに顔を合わせると会話する位の関係でした。
そんな彼女から突然よく分からない誘いを受け、戸惑いました。
「え?鮎?急にどうしたの?」
「昨日からなんか鮎食べたいなって思ってたんですよ、
でも釣り道具も釣りの経験もないからどうしようかなって迷ってたんですけど、
レイさんの家に釣り道具があるなら是非行ってみたいなって」
鮎の話の前に釣りの話を振られていたんですけど、まさかそんな事を探っていたとは思いませんでした。
「でもあれはご主人様の道具だし…僕は釣竿のセットのしかた位しかわかりませんよ

？」

「それなら大丈夫です！私は釣りについて何もわかりませんから！」

何が大丈夫なのか分からないまま、釣りに行く事は決まってしまいました。

ご主人様に連絡を取ったところ、

安い川釣り用なら使っていいと言われたので、それと道具一式を持ってのらちゃんと合流すると、

マキやハンゴウなど色々背負っていて、その気合に驚きながら川まで出かけました。

「じゃあ私はご飯とかの準備をしてるのでお願いしますね」

そうお願いされてから1時間近く、竿には何の手応えもなく、若干気持ちが焦ってきました。

日の下にずっといるせいでかなり汗も酷いし、肌に張り付く服の不快感にイライラする。

手応えのない竿を上げ、ポイントを変えて竿を振るう、針の落ちる場所をジッと見つめ確認していると、

「あの…大丈夫ですか？」

「えっ！えぇ！何がかな!?」

「いえ、なにか不機嫌そうだったんで…無理してお誘いしたの嫌だったのかなって…す

いません」
「そんなことないよ！ただ釣れなくて焦ってるだけだから！」
「本当ですか？それなら平気ですよ、釣れるまでずっと待ちますから」
そう答える顔は少しぎこちない物だった。
多分のらちゃんは私を無理矢理連れてきている事に負い目を感じているようだった。
僕からすると前から気になっていた隣人と距離を縮める機会だと思っているのだが、
互いの気持ちのズレを感じてより焦燥感が募る、早く掛かれと願うとついに釣り針に何かが来る気配を感じる。
焦る気持ちを抑え、合わせをして引き上げる。
「やった！やりましたよ！」
のらちゃんがピョンピョンと嬉しそうにはねる。
「良かった…これで最悪でものらちゃんは食べれるね」
「何言ってるんですか、今流れが来たんですからこれからガンガン釣れますよ！
あっ！ご飯のこと忘れてた」
そういうとハンゴウの元に急いで戻っていった。
のらちゃんの言ったとおり、その後はポンポンと3匹釣る事ができたんです。
４匹の鮎を串に刺して、塩焼きにしました。

少し焦げ目のついた白いご飯と鮎の塩焼き、見た目はシンプルだがとてもすばらしいご馳走に見えました。
「ごめんなさい、焦げちゃいました」と頭を下げるが「ううん、僕そういうの好きだから」というと、
「そうですよね！美味しいですよねおこげ！」と目を輝かせました。
「いただきます」
串のついたままの鮎を手に取り、口にいれる前にのらちゃんの方を見る。
焼きたての鮎にかぶりつき、あつっ！と言いながら一度口を離す、
今度はゆっくりと慎重に口に運ぶ、そっと鮎の身を口に入れるとモグモグとゆっくりと味わう。
「おいしい」と呟くと再び、鮎を口に運ぶ。
可愛らしいその仕草に苦労したけど釣れて良かったな、と改めて安堵しました。
僕も人の食べる姿を見ているだけじゃなく食べないと、と鮎を口に運ぶ。
シンプルな身に塩ピッタリ合いとても美味しくて、夢中に食べてしまいつい、ご飯に手を出さずに一匹を食べ終えてしまう。
そこで一息をついてから口を開く。
「あの…のらちゃん、さっきの事だけど今日は誘ってくれて凄く嬉しかったよ」

「あっ…本当ですか？ピリピリしてるみたいでちょっと不安でしたけど」
「あれはちょっと汗のせいでイライラしてただけだよ……」
「なんだ、そんな事だったんですね、不安になって損しちゃいました」
お互いに生じそうになった不和を消すように、笑いを飛ばす。
これからはもっと仲良くなれそう、そう思いながら青い空を見渡す。
さっきまでストレスの原因だった日の光が今では心地よい物に変わった気がする。
もう一匹を食べようと手を伸ばすと
「次は…イワナかな……」と呟く声が聞こえた気がしたけど今は気にしないことにします。

自覚できない想い

森の中で一人ぼっちで震える夢を見た。
孤独に震え、眠る事すら恐怖している私がそこにはいた。
朽ちていく事を受け入れるしかない自分の無力さが怖かった。
永遠の眠りにつく事をずっと恐れていた。
死にたくない、死にたくないとずっと心の中で叫び続けていた。
口に出せば私の心を壊してしまいそうな恐怖を延々と押し込み、震え続けていた。
真夜中にふと目を覚ました、私はカーテンの隙間から見える星空を眺めながら考えていた。
あの森にいる時の私はなんであんなにも死ぬ事を恐れいていたのだろうか。
安穏とした生活、死という概念から離れたことでそんな事が頭に浮かんできた。
幾年も前の出来事、しかものらさんに拾われる少し前からは思考を放棄していた事もあり、
記憶はかなりおぼろげになっている。
いくら頭を働かせて考えてもただ死にたくなかった、それしか思い出せなかった。

人間の模倣として作られた存在だとしても、忘却までも機能としてつける必要もないだろうに、

ままならない自分の体に思わずため息がこぼれた。

目を覚ましてから４日ほどが経った。

目が覚ませてすぐの拷問のような皮膚の修復を終えて以来、衝撃的な出来事はない。

生きていた中で、平穏で命を掛ける必要も無い日々というものは経験した事がなく新鮮だった。

のらさんに全てを頼りきりというのは申し訳ない気持ちで一杯だったが、だんだんとそれで良いと思いつつある自分が心配になる。

体が戻るまでに変な癖が付いてしまいそうで不安だ。

「そろそろ散歩にでも行きたいですね」

昼食を終えた後にのらさんが呟く、確かに私が目を覚ましてから、ずっと私と一緒にいたのだから羽を伸ばしたい頃合だろう。

「そうだね、好きにして来たらいいよ。テレビでもつけておいてくれたら私はそれでいい」

「何いってるんですか、タマさんも一緒に行くんですよ」

「私も？でも私なんか連れ歩いたら重いし邪魔だろ？」

「そこはちゃんと考えてますよ、車椅子を用意しておきましたから」
私は家にいるだけで十分だと断ったが「私がタマさんと一緒に行きたいんです」と脇に抱えられてしまった。
体をくねらせ、文句を言いながらどうにか脱出しようとするが全く意に介さない、そこは元戦闘用といった所だろうか。
抵抗は無駄に終わり、ガレージに置いてある車椅子に座らさせられてしまった。
「そんな不機嫌そうにしなくてもいいじゃないですか」
「別に不機嫌な訳じゃない、恥ずかしいだけだ」
カタカタと小刻みに揺れる車椅子の上で私は顔をしかめている。
「戦時中の負傷なんですから、恥じること無いじゃないですか」
少し悲しそうな声で私を諭す。
しかし私も自分の状況を恥じるものではないと自負している、ただそれ以外の問題がある。
のらさんに頼りきりという状況を、甘えているのを他者に見られるのが恥ずかしい。
彼女に横にいる事が出来ない今の自分を見られるのが恥ずかしかった。
だけどそれを彼女に伝える事もできないでいた、この気持ちがなんなのか自分でもわからない、

そんな気持ちを相手に伝えても意味が無いような気もする、
言葉にできない気持ちをどう伝えたらいいのか、悩んだまま返答はできなかった。

綺麗に整えられた歩道の上を車椅子で進んでいく。
最初は妙な恥のせいで目に入っていなかったが、落ち着いて周囲を眺めてみると以外に悪いものではなかった。
戦後に区画整理などの都合で作り直されたとのらさんは語る。
どの家も綺麗に整った外見をしており、手をかけて作られているような庭も多く見られ、それらを見ているだけで楽しめた。
「そういえば、これからどこに行くつもりなんだ?」
「別にどこに行くっていうのは決めてませんよ、歩き回って疲れたら帰ろうかなって感じです。
行ってみたい場所があるなら聞きますよ」
「行きたい場所って言われてもね…じゃあのらさんのオススメの場所でも行ってみようか」
「私のオススメですか?じゃあ……あそこでいいですかね?」
「あそこって?」と聞いてみたが「秘密です」と言われはぐらかされてしまった。

あそことやらに行く最中、何度か人とすれ違った。
人間だけでなく私達のようにのらきゃっと型アンドロイドも見えた。
その内の一人のメイド服を着たのらきゃっと型はこちらを見つけるとパタパタと駆け寄ってきた。
「こんにちは、のらちゃん！」「こんにちは、レイちゃん」二人で挨拶を交わすと簡単に紹介される。
「こちらは私の友達のレイちゃんです、家が近いのでたまに遊んだりしてるんですよ」
「そう私はタマ、今のらさんの所にお世話になってる、まあ……よろしく」
「タマちゃんですか。僕はレイ、メイドをやってます」スカートを両手で摘み、軽く膝をまげて挨拶をする。
「ところでタマちゃんは噂の樹海で拾われた子なんですよね？」
話を聞いたところ、ボロボロの私を背負って帰って来たのらさんの姿は大勢に見られていて、
私が目覚めるまでの数日間で噂になっていたらしい。
「ええ、そうですよ。とっても元気ないい子なんですよ」
「私はあんたの子供になったつもりはないぞ」
軽く会話をした後レイさんは買い物に行くからと別の道を行った。

「あんな感じのアンドロイドって結構いるのかい？」
「あんな感じ？ああ、人間と暮らしてるってことですか？まあ結構いますね」
「ふーん、機械と人間でね」
その話を聞いた時、心の奥にチクリとささる物があった。

レイちゃんと別れてから、タマさんは何かを考えるように黙ってしまった。
何を喋っても聞いてるのか聞いてないのわからない感じのまま歩き続け、目的地へと到着する。
「着きましたよ！ここが私のとっておきの場所です！」
ブランコとシーソーと砂場、そしてベンチの有る小さな公園、いつも通りそこで遊ぶ子供の姿はない。
「ここが？なんか…普通の公園って感じだな」
「ここはただの公園じゃないんですよ、区画整理の結果、路地の奥まった場所になってしまい、
近所に子供がいないので誰も使わない場所になってしまったんですよ。
しかも日当たりの良いので外でお昼寝するのに最適なんです！」
「ここまで来てするのが昼寝？」「はい、タマさんも好きでしょう？」

嫌いじゃないけどさ、と短く答えるのを聞き、ベンチの前に車椅子を止めてその前に座る。

日は少し強いが、風も出ていてそのおかげで心地よい気温だった。

心地よさにゆられてうつらうつらとしていると突然声をかけられた。

「なあ、のらさん……話ておきたいんだ」

突然真に迫った雰囲気に驚く、眠いから後にしてとは言えない空気に頭を振って眠気を飛ばす。

「突然どうしたんですか?」

「私がこうなった原因、何時までも黙ってる訳にはいかないだろ」

――

とても無謀な戦い方をして仲間を守る、タマさんが語ったのはそういう話だった。

空中戦闘用の装備を何も付けずに空を賭け、戦闘機を落とすのは私でもやろうとは思えないような無茶な戦い方だ。

「なるほど、その戦いの結果、四肢が破損してしまったんですね」

「両手は事故みたいな物だけどね、あそこでちゃんと回避してれば這ってでも移動できた訳だし」

自嘲するように笑った後に空を仰ぎ、ため息をつく。

「問題はその先さ、生死の確認も出来ていないのに部隊の奴らは私を助けに来なかったんだ。
　あいつらとの関係は悪くなかったと思うんだけどな、そう思ってたのは私だけだったみたいだ」
「それは……あれですよ、戦争中に一人のために救助隊を出す訳にもいきませんから……」
「じゃあ戦争が終わって何年も経っているのに私があそこにいた理由は？
　輸送機の空路をさかのぼれば、私がどこにいるのか割り出すのだって難しくないだろう？見捨てられたんだよ！私は！」
　自分の境遇、過去の出来事を今まで語ろうとしなかった理由、それはきっと私に話せば嫌でも思い出しまうからだろうか？
　少しでも頭の中に置きたくない記憶、それと向き合うのが嫌で語らなかったのか？
　名前を教えてくれないのはそれが原因だというのは理解できた。
「だから私は驚いたよ、私達を使い捨ての機械でなく、一人の人間として見てくれてる人がいるって事にさ。
　のらさんとレイは本当に運がいいよな……本当に…」
　抑えていた気持ちを吐露したせいだろう、彼女は泣き始めてしまった。

少しでも悲しみを和らげられるなら、と彼女を抱きしめる。
大切な人達から裏切られたという悲しみ、命を懸けた結果が地獄へと続いていたのだからそれは辛いものだろう。
あの境遇に落ちた不運が、真に自分を大事にしてくれる人に出会えなかったのが原因だと答えを出したのか？
だとしたら私にはその悲しみを癒す方法はない。
孤独に沈んだ気持ちを少しでも埋めるにはどうしたらいいのか？
何をしたらいいのか、考えを巡らせるが耳元で聞こえる泣き声に思考を遮られる。
そうしている内になんだかイライラしてきた。
私はタマさんの事を思って色々考えているのに、昔の仲間たちの事で涙を流し続けている。
自分を捨てたかも知れない人の事で泣いている。
今のタマさんの中に私がいない、そう思ったら段々ムカついてきた。
言葉にならない嗚咽ばかりを生み出すその口を見つめ、衝動的に動いてしまった。
不思議な味がした、涙の味とはこういうものなのかと少し冷静になった頭で考える。
重なっていた唇を離し、一息つく。
「落ち着きましたか？」

「落ち着くもなにも……何をするんだ！私の……私の初めてだったんだぞ！」
　顔を真っ赤にしながら叫んできたその発言に、申し訳ない気持ちもあるがなんだか面白くて思わず笑ってしまう。
「ふっふふふ、あはははははは」
「おい！笑ってるんじゃない！本気だぞ！どう責任をとるつもりだ！」
　そのまま少し笑い続け、笑いを収めてタマさんの方を見るととても不機嫌そうな顔をしていた。
「ごめんなさい、なんだか笑えてきちゃって」
「笑えるような事は言ってないだろ、本当に…なんて事をするんだか……」
　思っていたよりタマさんの貞操観念が固いもののようだった、無作法な事をしてしまい申し訳ないと思った。
　うつむきながらブツブツと文句を言い続けているが、先ほどよりはマシな状況だろう。
「確かに私も酷い事をしてしまいましたね、でもタマさんだって酷いです」
「私が？私はただ……」再び過去のことを思い出したのか暗い空気をまとう。
「それですよ！その昔の人を思い出して泣くのを止めてください、どこにいるのかも分からない人達よりも私を見てください。

昔の事を思い出して孤独を感じる暇があるなら私をもっと見つめてください」
両手で彼女の肩を掴み、彼女の目をジッと見つめる。
勢いよく迫りすぎたせいなのか、彼女に目を背けられてしまった。
「私じゃ…駄目……ですか?」
「駄目なんてそんな……良いも駄目、私はこんなだし、のらさんに従うしかないだろ」
恐る恐る顔を上げ私の目を見つめ返す、私の赤い瞳とは違う、青い瞳に私の顔が映っている。
「何の質問なんだよ、好き嫌いで言ったら当然好きだ、嫌いだったらキスされた時に噛み付いてやってるよ」
何の質問だったか、確かに考えて見ると妙な質問なような気がする、私は何が聞きたかったのだろう。
「そうですね、変な質問でした、さっき聞いた事は忘れちゃってください。
それじゃあ、もう帰りましょうか、なんだかここでお昼寝って気分じゃなくなりましたし」
「うん、それでいいよ。今はとりあえず甘い物でも食べたい気分だよ」
「帰りにコンビニでも寄りましょう、新しいスイーツがあるかもしれませんし」
ともすれば彼女の心は私に開かれることが無くなってしまう様な、そんな危機感を覚

えたが杞憂だったようだ。
コンビニのスイーツに目を輝かせている彼女を見る限り、そんな不安は感じられない。
衝動的な行動だったが、それで全部上手い方向に回ったように感じた。
ただ私はやはり違和感を感じていた。
タマさんの話に嘘偽りはないだろう、だけど部隊の人達が全滅したという可能性も十分あるはずなのに、
彼女の話の上では全員が今も生きている前提で語られていた、恐らく彼女の願望なのだろう。
先ほどまでの彼女の様子から考えると、恐らくとても信頼関係の深い部隊だった。
そんな人達がいつまでも助けにいかなかった、その理由は考えるに、あまり良い理由は思い浮かばない。
恐らく彼女はそれを受け入れる事が出来なかった、だから彼女の中では部隊の人達は自分を見捨てる冷たい奴らだと自分に言い聞かせ続けた。
まるでそれが真実であるかのように。
私の推測はそんな所だが、それを彼女に聞く事はないだろう。
でも、もしかしたら。

良い情報を得る事はできないと思うが、明日は軍部に足を伸ばす予定を頭の中で立てた。

「よし！私この大きな大福にする！」

「それ、タマさんが食べるのはちょっと難しいと思いますよ」

中に苺のショートケーキが入った大福、柔らかくて口だけで食べるのは難しいと思い忠告する。

「別に難しくてもいいさ、せいぜい顔が汚れる位だ」

ウキウキした表情でそう答える、私が顔を拭いてあげれば良いだけか。

そう思いながら二つ入りの物を手に取りレジへ向かった。

電気猫の見た夢

「すいません、今日は用事があるのでお留守番をお願いします」と頼まれたので申し受けたが、

留守番と言っても非常事態時に私に何ができるのか、そんな事を考えながらリビングで一人ボーっとしている。

「暇だったらテレビでも見ていてください、音声入力で何でもできますから」と言われたが、私の声には反応しなかった。

どうやら声帯が認証されていない私の声には反応しないようだった。

「テレビ、つけ」「テレビ、起動」「テレビ、開始!」「テレビ、始動!!」

もしかしたら単語が悪いのでは?私の声が小さかったのか?思いつく限りで試してみたが、やはり私の声には何も反応しない。

のらさんの普段の態度や物腰で騙されてしまうが、やはり彼女はどこか抜けているなと思わず笑いがこぼれた。

その笑い声を最後に部屋には静寂が訪れる。

暇を潰す方法は何も無く、不完全な私の体を映す液晶をただ眺める事しかできなかっ

た。

夕方までには帰る、というのらさんの言葉を思い出し時計を見るが、まだ1時を少しすぎた位だった。

「はぁーー……暇だな」溜め息と共に思わず愚痴がこぼれる、どうにかこの暇を潰す手段は無いものかと考えると一つの案が浮かんだ。

「久々に使うか、スリープモード」あまりお世話になりたくない気持ちは強いがこのまま待つほうが辛いと感じ、使うことにした。

ただの睡眠をしようにも今は眠気がなく、眠れそうな気配もなかった。

目をつむり、自身の機能のメニューから電源に関する物を表示させる。

今まではスリープの期間が7日に設定されていたが今はそんなに眠る必要が無い、ただ数時間眠れば見知った顔に出会える。

そう考えるとなんだかとても暖かい気持ちになれた。

そうやって少し気分がよくなったのもつかの間、今では眉間に皺を寄せてテレビの画面を睨みつけている。

「まさか日数単位でしか設定できないとは……」

樹海に落ちたあの日まで一度も使うことがなかった機能だっただけに、こんなに使い勝手の悪い物だとは思っていなかった。

いっその事、丸1日寝ていようかとも考えた。
しかしそう考えた時に浮かんできたのは彼女の寂しそうな顔だった。
家に帰り、同居人から「おかえり」の声を期待して「ただいま」と言う。
しかしその声に応える声は無く、同居人は目をつぶったまま動かない。
そんな姿を見たら彼女はどう思うだろう、悲しむだろうか？怒るだろうか？
ベッドに運び、優しく布団を掛けて私が目を覚ますのを待つのだろうか？
答えの出ない疑問を延々と考える、
自分でも馬鹿な事を考えているのは分かっているが、他にやる事もないので延々と自問自答をし続けた。
ふと気がつくと、不思議な空間にいた。
白い地面が地平線まで続いていて、空は太陽がないのに青く澄み渡っている。
一瞬私が死んでしまって天国に来てしまったのかと焦ったが、過去に何度か見覚えのある景色だと気がつく。
たしかここは夢の中、夢というよりは身体的な眠りと意識の齟齬が生み出すバグに近い現象、
アンドロイドの見る明晰夢のような物だと以前聞かされた、その空間の中に私はいた。

自分の体を見ると自分の手足を久々に確認することが出来た。
しかし自分のイメージする自分、軍服を着た姿を私の姿として記憶していたはずなのに何故かのらさんの着ているドレスを着ていた。
「ははは、私にはこんなの似合わないって」少し恥かしくなりながらもその場でクルリと回る。
そのまま2度、3度その場で踊るように回った、地を踏む感触はないがそれでも自分の力で動ける事がとても嬉しかった。
自分の望むままに体が動くということが楽しく、ただ駆け回っていたがふと思いつく、
夢の中なのだから自分の思うがままに出来るのではないかと。
降って沸いてきたイメージがそこに現れるように願う、目を閉じてそこにいるんだと自分に言い聞かせる。
「どうしたんですか?タマさん」不意に声を掛けられて驚き、目を開くとそこには彼女が立っていた。
私の想像の彼女は私に声を掛けてから、その場でジーっと私を見つめ、目が合うと微笑む以外に動く気配はない。
あくまでここは私の頭の中でだけ存在している夢、仮想世界でしかない。

目の前にいるのらさんも私が頭の中で考えているだけの存在、私が意図しない限りは動かないようだった。
「こんな物作って私は何がしたいんだ……」
作り出してしまった手前、消してしまうのもはばかられとりあえず頭を撫でる、しかし私の中に頭を撫でられているのらさんのデータが無いせいだろうか？
目の前にいる彼女はただ平然とそれを受けているだけで何の反応も無い、それでも柔らかな毛皮の様に柔らかな感触はあった。
撫で続けていると動きのなかった彼女は突然口を開く。
「いいんですよ、私の事を好きにしてくれて」
突然の発言に頭が真っ白になりそうになる。
「好きにって……別にのらさんにしたいことなんて何も……」
「本当ですか？実が昨日からずっと考えてたじゃないですか。
私にファーストキスを奪われて、どうにか仕返しできないかって」
体を屈め、手を後ろに回して私を見上げるような姿勢をとった、思わず見下ろしたその顔は私をからかう様な笑みを浮かべている。
「ほら、少し手を伸ばせば届く距離ですよ。それとも私じゃダメですか？」
「ダメとかそういう話はじゃなくて…えっと……のらさんの事は好きだよ、だけど…」

「なら何も問題ないじゃないですか」
その言葉で私の中の何かが切れた感じがした、真っ白になった頭でただ自分の欲望に従う。
両手で彼女の頬を包み上を向かせた。
「痛いことはしちゃダメですよ? 酷い事されたらきっと嫌いになりますから」
「酷い事先に酷い事をしたのはそっちの方だろ」
彼女は私の手の中で、やはりからかう様な笑顔を作る、のらりくらりと私の言葉を躱すように。
誘ってきたのは彼女の方が今ある衝動を抑える必要は無い、私は思うままに彼女の唇を奪った。
先日の、公園のあの時感じた柔らかな感触が蘇る、私の心を救ってくれた暖かさを。
その暖かさに浸り、満たされた気持ちのまま目を開くと、そこには飽きるほど睨み続けていたテレビの液晶が目に入る。
夢は終わり現実に戻ってしまい、憂鬱な気持ちになる。
時計を見ると4時を回っていたがのらさんはまだ帰っていない。
「何を考えているんだ私は……」
夢の中を思い返し、顔がどんどん赤くなっていく。

ここまで数日の間、その中で今まで自分の中で理解できない感情を何度か抱いていたが、
それが何なのか今まで理解できないでいた。
だけどあの夢の中での出来事で私は気づいてしまった。
家族とも友人とも違う、もっと違う種類の絆を彼女に求めている自分に気づいてしまった。
彼女を、のらきゃっとを愛してしまっているんだと。
―――
夕焼けに染まる公園、ベンチで一人物思いに耽る。
足を運んだ時に響いていた子供の声はどこにも無く、お土産にと思って買ったアイスは溶けてしまっていた。
調べたい情報自体はびっくりするほど簡単に終わってしまった。
元々タマさんは戦死者として扱われていた事もあり、生存が確認された彼女に関するデータの修正を行っていた為、
そして仮の保護者として私が登録されていたのであっさりと完璧な情報を手に入れてしまった。
その内容は要約すると、彼女が輸送機から飛び出した後、更なる追撃にあい不時着、爆

散してしまったという。
不時着時、逃走時に3名死亡、生存者は1名、その1人も負傷により退役。
何時までも助けが来ない理由、死んだ者として扱われたのも納得がいった。
1名生存、その事実が私の頭を悩ませた。
全滅ならば、彼女の妄想に口裏を合わせて黙っていれば良いだけの話だった。
しかし生きている、1人になってしまったが今でも生きている。
その真実を知った時、彼女はどうするのだろうか?
彼女の幸せを考えたら真実を伝え、残った家族の元に送るのが最善の選択なのだと思う。
その場合は当然、私との生活は終わる事になる。
そう考えた時から私の胸はキリキリと締め付けられるような痛みを発し続けている。
彼女の為に私はどうしたらいいのか。
それを考え続けていたら日は赤みを帯び始めていた。
悩んでいてもしょうがないとベンチから立ち上がり、帰ろうとしたその時メールが届いたので内容を確認する。
『パーツの製造が完了しました、お越しいただければすぐに修理に取り掛かれます』
重い気持ちになるばかりだったが、一つだけでも明るくなれる話題が届き、胸が軽く

なる。

アイスだった物をゴミ箱に捨て気持ちを切り替える。

「悩んでたってしょうがないですね、とりあえず帰りましょう。

代わりのお土産はどうしましょうか?」

二人を繋ぐもの

外で長い時間気を揉んでいた為、玄関の扉を開けると私がただいまを言う前に苦情の声が響いた。

「おーそーいーぞー！夕方までには帰るって言ったのにもう日が暮れてるぞー」

「すいません、用事のついでに寄り道してたら遅くなっちゃいました」

足早にリビングに入るとソファーで横になっているタマさんが私を睨んでいる、

部屋の中はテレビがついておらず静まり返っている。

「あれ？テレビもつけないで寝てたんですか？映画とか色々見れるようにセットしておいたんですけど」

「ああ、それね。音声操作にセキュリティでもかかってたのか、私の声には全く反応しなかったよ」

背中にヒュッと悪寒が走る、動けない彼女を一人にするのだから出来る限り退屈しないようにと思っていたのだが、

致命的なミスを侵していた。

「あの……ごめんなさい、忘れてました。誤作動防止に個人ごとに登録しないと動かな

いんでした」
　ため息をこぼして肩を落とす。
「いや、そんなに気にしなくていいよ。確かに退屈だったけど今日は悪い日じゃなかった」
　確かに退屈な状況だったと思うのだが、彼女の口調はどこか楽しげだった。
「何かあったんですか?なんだか楽しそうですけど」
「まあ…なんて言うのかな、自分と向き合うには丁度良かったっていう?
　とにかくそんなのらさんが気を落とす必要はないって」
　照れ隠しのような笑いを浮かべて話を切り上げる、自分と向き合ったと言っていたが一体何が起きたのだろうか?
　気にはなるが様子から見て悪い事ではないようなのでとりあえず気にしない事にした。
「しかし改めて考えると…ここに来てからの毎日、私に合わせたメニューばかりで申し訳ないな…」
　二人分のシチューとパンを食卓に運ぶとタマさんがボソリと呟く。
「そんなの気にしなくいいんですよ、私は好きでお世話してるんですから」
「え!?ああっ、うん、それでも感謝とか、申し訳なさとかあるのには変わらないからさ」

「そんな、あなたが気にするほど苦労してませんよ、ほらあったかい内に食べちゃいましょう」

食卓につき、スプーンでシチューをすくい、彼女の口元へ運ぶと抵抗なく、口を開きそれを食べる、

熱い物だから慎重に口を開くが、目覚めた当初と違い食べさせられる事への照れというのはなくなったように見える。

「そんな風にジッと見られると恥ずかしいってば」

「まあまあ、減るものじゃないんですからいいじゃないですか」

そうして食事を終え、一息ついてから伝えるべき事を伝える。

「やっとタマさんの修理の準備ができたって連絡が来たんです！」

「おお！やっと準備ができたのか！」

タマさんを抱え上げグルグルと回り、勢いよくソファーに飛び込む。

ボスンと勢いよく飛び込んだ反動で床に投げ出され、ゴロゴロとそのまま転がった。

「そっか、ついに私は自分の力で動けるようになるんだな！」

「そうです！これで自由に動けるようになるんですよ！」

寝転んだまま、タマさんを掲げ見つめあう、彼女の瞳はここに来て一番輝いているような、そんな気がした。

掲げた彼女を再び抱きしめ、今度は自分の意思でゴロゴロと床の上ではしゃぎ回る。
「嬉しいのはわかるんだけど、なんなのこれ」
「修理が終わったらこんな事はできないなって思ったんだ、今のうちにやってしまおうかと」
盛り上がったテンションに任すまま、頭を撫で回したり、頬ずりしたりして、タマさんが怒るまでいじり倒した。
タマさんの体を身奇麗にし、明日外に出る準備をしてから床に就く。
「そういえばタマさんは体が戻ったらどうするんですか?」
「どうするって言われてもね、あんまり考えてなかったな。私達みたいなアンドロイドって戦後はどんな仕事があるんだ?」
「基本的には人間の皆さんと変わりませんよ、やりたい事を探して好きにしてます。望むなら1から勉強だってさせてもらえますから」
「へー、それは意外だね。どうせ小間使いにされてるものだと思ってたよ」
「終戦後は結構問題になりましたからね、私達をどうするかって」
「それでどうなった? 結構悪くなさそうだけど」
「沢山いたんですよ、私達の事を守ってくれる人達が。
そういう人達の意見もあって原則武装の禁止、のらきゃっとモデルの製造禁止、量子

ＡＩを持つアンドロイドの同時存在可能数の制定とか、
制限なども付けられましたが、それで人間と同じ世界で生きていけるようになったんです。
後軍属期間に応じてお給料もでましたよ」
「へー、意外な話ばかりだな。私が想像していた待遇の１００倍は良い」
「そうですね、私も武器を没収されるだけで自由になったんで拍子抜けしましたよ。
最悪の場合、仲間を募って人間に宣戦布告しようと計画も立ててたんで」
冗談を言ったつもりだっただ本気で取られてしまったのか、タマさんは乾いた笑いで答える。
「まあ実際の所、みなさんもう嫌になってたんでしょうね、近くにいる人がいなくなるのを」
ネックレスを指で撫で、遠くに行ってしまった仲間達の事を思い出す。
「そうか…そういうものなのかな」
「そういうものなんでしょうね」
それを最後に沈黙が響く。
もうタマさんは寝てしまったのかと思った時、彼女の答えが返ってきた。
「私はのらさんと一緒にいるよ、だってまだのらさんのご主人様が帰ってくるのは大分

先なんだろ？
恩人に寂しい思いをさせるほど恩知らずじゃないよ」
朝、目を覚ますと送迎用の車が来ていたのでそれに乗り、数十分ほど揺られて工場につく。
物々しい扉の奥に通されると気難しそうに眉をひそめた、いかにも学者といった風貌の人物が椅子に座って待っていた。
「おはようございます、こちらが今日修理をお願いしたいタマさんです」
車椅子を押し、彼女を前にだす「おはようございます…その、お願いします」
「はい、おはよう。酷い状態の子の修理だって言うから心配してたけど、受け答えが出来るようなら問題ないね」
気難しそうな顔を緩ませ、タマさんの前に身を屈め体を眺め始める、安心して修理を任せられそうな人のようで安心する。
検分を終えて、作業台の上に載せられると大掛かりなスキャンが行われた、内部にも異常がある可能性は十分にあるという話だった。
スキャンの結果が出ると先生はそれを睨みながら口を開いた。
「これは結構個人差のある話なんだけど、タマさんは出来るだけ元の体を残しておきたいかな？」

「出来るなら残して置きたいかな……こんなだけどこの体だから私は生き残れたって、そう思うんだ」

「そうだね、タマさんの場合四肢のパーツは完全に壊れている訳ではない、接続部はまだ生きているんだ。

強力な衝撃により接続部のエネルギー回路が壊れているだけで修理は可能だ。

だから君が望むならその接続部を修理する事でそこに新しい手足を付けることが出来るのだけど、

それをやると肌に大きく傷が残るけど、それでもやるかい？」

「ああ、それでもいいよ。お願いするよ先生」

スキャンの結果内部パーツにもやはり異常があり、

放置すると死ぬ危険もあるという事で思ったより大掛かりな修理になってしまったようだった。

恐らく丸1日かかるだろうと言われ、私は部屋を追い出されてしまった。

時間がかかるのなら、それはそれで良かった。

多分私の考えが正しければ、今から連絡を取ろうとしている相手にタマさんの事を話すとタマさんとは別れてしまう事になるだろう。

そう考えるとやはり胸を掻き出したくなるほどに苦しくなる。

しかし何時までも捻じ曲げた想いで過去を恨むの何て私は間違っていると思う。
私は湧き上がる苦しみを押さえ、タマさんの家族へ連絡をとった。

連絡に出た相手は、そんなに悪い印象を覚えないような人だった。
事情を説明すると仕事を切り上げ急いで工場に来ると言い、ギリギリ修理が終わる少し前に到着した。
話を聞いてみると今は自然をメインにしたカメラマンをやっているという。
深い森の奥に落ちたタマさんを探している内に何かに目覚めてそうなったらしい。
タマさんの現状を伝えている内に作業が終わり、ラボに入るようにアナウンスが入る。
「それじゃあ、彼女に顔を見せてあげてください、でも気をつけてくださいね。
きっとあなたの話を聞く前に拳が飛んでくるでしょうから」
「ははは、気をつけるよ。
いや、俺よりもまず君が顔見せた方がいいんじゃないかな?」
「私は後で良いんですよ、少しでも早く誤解をといてあげてください」
私が背中を押すと、それに促されるままに彼は扉の奥へ向かっていった、
反対の扉から部屋を出ようとすると、扉に勢い良く物がぶつかる音が響いた。

怒号の後に何かを叩く音が何回か響いた後、静寂が訪れる。
耳を澄ますとわずかに泣き声が聞こえた。
「タマさん……よかったですね……」
別れを惜しんでも辛くなるだけ、後ろ髪を引かれる思いで部屋を出た。

その顔を見た時、思わず手が伸びていた。
私が目覚めて最初にした事は昔、兄として慕っていた同じ部隊の一人を殴る事だった。
衝動のままに殴りつけてしまったが、反撃も防御もしない彼に私の手は止まっていた。
「お前が味わった苦労に比べたらこの位なんでもないさ」と言う。
そして兄は語り始めた、部隊がどうなったのか、そして何故自分がここにいるのかを。
部隊の皆の話を聞いた時、頭に架かっていた靄が晴れるような感覚がした、それと同時涙があふれて止まらなくなってしまった。
ただ泣き続ける私を兄は優しく慰めてくれた、私が泣き終わるまでずっと。
そして私が落ち着いてから、学者の人を含めて私の身の振り方について軽く話す事になった。

私としてはのらさんとまだしばらく暮らしたいと申し出をだすと兄もお前が望むならそれでいいと了承してくれた。
連絡をとれるように連絡手段の交換、そして何かあれば頼ってくれと家の住所も教えてもらった。
基本的には家にいないという、あまり意味の無さそうなものだったが。
そして私は早速のらさんと会おうとラボを出るが先に帰ってしまったと工場の人に教えてもらい、家に帰ることにした。――――
どこに行くでもなく、あちらこちらをふらふらと歩きまわり、気がつけば人気のない公園まで足を伸ばしていた。
タマさんと初めてのお出かけで来た公園、ここで彼女の過去の話を聞かなければ今日別れる事もなかったんじゃないかとぼんやり考えてしまう。
一人になるのが嫌というよりも、彼女がいない日常が来るということが悲しかった。
私の見えない所で、私がいなくても彼女は生きていく。
そう思うと心の中身がサーッと流れ出ていくような虚しさを感じてしまう。
何もする気が起きないまま、ベンチに座り傾いていく太陽をジッと眺めていた。
「家にいないと思ったらこんな所にいた！どこで道草食ってるんだよ！」
呆けながら空を眺めている内に眠ってしまったようで、突然の大声で目を覚ます。

そこには見覚えのない、のらきゃっとが立っていた。
髪は後ろでまとめ、Tシャツとハーフパンツと随分ラフな服装をしていて、
シャツの袖からは後から無理やり縫い合わせたような傷のようなものが見えた。
「えっと…どなたですか?」
「手足が戻ったくらいでどなたって言うのは酷いんじゃないか?私だよ、タマだ」
「え?!あっ!タマさん!どうしてこんな所に?!」
「それはこっちのセリフだよ、なんで私を置いてこんな所にいるのかって話だよ」
話しながら私の隣に腰を下ろす。
自分の力で動く彼女を見ると、なんだか心にむず痒さを覚えた。
「だって…せっかく昔の仲間…家族に等しい人と再開したのに……」
「うん…それは本当に感謝してる。
私、ずっと考えないようにしてたんだと思う、皆が死んでしまったなんて考えたくもなかったんだ。
だからその事をずっと考えないようにしてたし、その事も忘れてた。
それで今は凄く晴々とした気分になれたんだ、今なら現実とも向き合える」
「だったら、私と一緒にいるよりあの人の所に行ったほうがいいですよ。
せっかく会えたんですから」

そう私が言うと、何か言葉を捜すような挙動をし始める。
貧乏ゆすりをしたり、ベンチの周りをグルグルと回ったりして、しばらくするとようやく思いついたのか口を開く。
「私が今一緒にいたいのはのらさん！あなたなんだ！昨日の夜にそういっただろ！
家族よりもあなたといたいんだ、だから……」
「だから？」
「家に帰ろう、その……今の私にはそれ以外、伝えられる言葉が思いつかないんだ」
さっきまで感じていた寂しさは彼女の話を聞いている内にどこかに消えてしまった。
今感じているこの気持ち、それがどういう物なのか理解できなかったが、
それでもこの気持ちは彼女が今抱いている物と同じ物だというのはなんとなく理解できた。
タマさんが恥ずかしそうに手を差し伸べている。
タマさんの望む事、それが私と同じ事なら何も拒む必要なんてなかったんだと思い、その手を握る。
「そうですね、帰りましょう」
私は出来る限りの心を込めて笑顔を作り、彼女に引かれるまま歩き始めた。

「そういえば私の名前言ってなかったね、実は私タマって言うんだ。
　これからもよろしく」
「え？タマ？え??」
「やっぱり気づいてなかったんだな……私の事調べてたのに」
「ああ！そういえば資料にそう書いてありました！
　え？でもそれなら嫌じゃなかったんですか？」
「んーー…ないしょ、その内話したくなったら話すよ」